

## 家族画テストにおける一般児童の特徴

寺 嶋 繁 典・足 利 学・宮 島 千 鶴  
澤 村 律 子・田 中 英 高

The characteristics of children's Family Drawings

Shigenori TERASHIMA, Manabu ASHIKAGA, Chizuru MIYAJIMA,  
Rituko SAWAMURA, Hidetaka TANAKA

### Abstract

Family drawings are useful in investigating children's intra-familial relationships. However, to use family drawings effectively in a clinical setting, it is necessary to study the characteristics of such drawings. To this end, we analyzed the family drawings of 380 children 6 to 12 years old of age and calculated the frequency of 30 items, such as compartmentalization, encapsulation, edging and so on.

Keywords : Family drawing, Psychological test, Children

### 抄 録

家族画は子どもが主観的に認知している家族関係を知るのに有効な手段であると考えられるが、これを心理テストとして臨床場面で適切に用いるためには、まず、一般児童の家族画の特徴を明らかにする必要がある。そこでわれわれは、380名の児童を対象に家族画を実施し、区分化、包囲、エッジングなど、30項目について出現頻度を調査した。

キーワード：家族画テスト、心理テスト、児童

## はじめに

チックや心因性視力障害など、いわゆるストレス性疾患に罹患して小児科や精神科を訪れる子どもの中には、親子関係に著しい歪みを生じている者がきわめて多い。彼らに適切な心理的援助を行うためには、患児が主観的に認知している家族の布置を明らかにしなければならない。これは患児との面接によっても、ある程度、明らかにできるが、言語的表現能力の発達途上にある小児の場合、自分の感情や欲求を適切に表現できるとはかぎらない。まして、本人の気づかない無意識のレベルのものについては明らかにするのがきわめて困難であろう。このような場面では、言語を媒介としない情報収集の手段を組み合わせる用いる必要があり、描画法、特に家族画はこれに適した方法であろう。高橋(1987)は『家族画はグラフィック・コミュニケーションの働きにより、被検者の言語化できない内容が絵によって図示的に表現されるために、被検者が家族成員や家族関係をどのように眺め、特定の家族成員にどのような欲求や感情を抱いているのかを明らかにしやすい』と述べている。しかし従来の家族画にはさまざまな実施方法があり、結果の整理・解釈も一定ではない。心理テストとして家族画を臨床場面で適切に用いるためには、実施方法を統一し、さまざまな集団における家族画の特徴をあらかじめ明らかにする必要があるだろう。

## 心理テストとしての家族描画法

被検者の家族関係を理解する手段として家族画をはじめて用いたのは Hulse (1952) と Porot (1952) であろう。Hulse は『あなたの家族を描いてください』という教示を使用し、A4判以上の大きさの画用紙と鉛筆ならびに色鉛筆を用具として用いており、Porot もほぼ同様の方法を採用している。この方法では、年齢や身長順、あるいは父親、母親、子どもという家族の序列によって絵が描かれる単純な家族描写、すなわち合理的・防衛的描写になりがちで、得られる情報も限られている。これを避けるために Shearn (1969) らは、『ある家族を描いてください』という教示を用い、被検者の家族へのイメージを明らかにする試みを行っている。また Bing (1970) は各々の家族に異なった色のフェルトペンを渡し、同時に1つの家族画を描かせる合同家族画 (Conjoint Family Drawing : CFD) を考案している。

さらに家族画に運動性を付加することで、単純な家族描写を避け情報量の拡大を意図して開発されたのが Burns と Kaufman (1970) の動的家族画 (Kinetic Family Drawing : KFD) である。彼らは『あなたも含めて、あなたの家族の人たちが何かをしているところを描いてください。漫画とかスティック画ではなく、人物全体を描くようにしてください』という教示を用いている。Burns 以降、KFD は、O'Brien と Patton (1974)、Sims (1974)、Levenberg (1975)

など、多くの研究者によって、心理テストとしての有用性が検討され、小児臨床を中心に広く利用されるようになった。日本では日比（1973, 1974, 1975, 1990）がKFDにおける区分化、包囲、人物下線などの特徴の出現頻度を調査し、KFDの発達的变化、特に自我同一性の発達の推移などについて詳細に報告している。また加藤ら（1976, 1977, 1978, 1986）もKFDに関する一連の研究を行い、児童のKFDの特徴について検討している。さらに石川（1982）は先のBingのCFDに動的要素を付加した合同動的家族画（Conjoint Kinetic Family Drawing：CKFD）を考案し、家族相互の関係がより表現されやすいように工夫するとともに、家族画の治療への導入についても検討している。

このようにKFDでは家族画に運動性を取り入れることで、従来の非動的家族画では得にくかった全体的な家族内力動が理解しやすくなったのは事実であろう。しかし家族を全員描かせたり、漫画やスティック画ではなく人物を普通に、しかも全身を描かせるなどの制約を加えるために、個々の家族に対する被検者の感情、欲求、態度などがかえって表現されにくい場合もある。Hulseは、家族が全員描かれているのか、それとも特定の人物だけが描かれていないのかどうか、家族への個人的態度を理解する上でもっとも重要であるとの見解を示してきた。

そこでわれわれは、単純な家族描写に陥ることなく、被検者が主観的に認知している家族の布置を広くとらえるための方法として、『私の家族』という課題の家族画（Family Drawing Test：FDT）について検討してきた。元来、FDTは家族画研究会（現日本描画テスト・描画療法学会）で、家族画の基礎研究を行う目的で統一された方式であり、『私の家族という題で絵を描いてください』とだけ教示し描画を開始する。したがって被検者がこのテーマについてどのような絵を描くのか、あるいは誰を描くのかはまったく自由であり、結果的に合理的・防衛的描写が減少すると考えられる。しかしFDTを心理テストとして臨床場面で適切に用いるためには、年齢や性の異なるさまざまな集団で、いかなるFDTが描かれるのかをあらかじめ明らかにする必要がある。

## 目 的

本研究の目的は、小学校1年生から6年生までの一般児童に実施したFDTを調査し、彼らの描画の特徴を数量的に明らかにすることである。これらは今後、臨床群のFDTの特徴を明らかにするための基礎資料として、きわめて意義あるものと考えられる。

## 被 検 者

FDTを実施した被検者は、表1に示すとおりであり、小学校の1年生から6年生の一般児童380名で、このうち男子児童は183名で、女子児童は197名である。

表1 被検者の構成

	低学年群 (1年生～2年生)	中学年群 (3年生～4年生)	高学年群 (5年生～6年生)
男子	79	53	51
女子	79	56	62
合計	158	109	113

## FDTの実施方法

FDTの実施方法は日本描画テスト・描画療法学会の方法にしたがって、B4判の画用紙、HBの鉛筆、JIS規格の12色の色鉛筆を使用し、『私の家族という題で絵を描いてください』という指示によって開始し、3名ないし4名ごとに実施した。また描画の途中で児童が質問をしたときには、原則として『自由に描いてください』と答えた。また描画時には制限を設けず、各々の児童が終了するまでに要した時間を記録した。さらに描画終了後、児童に描いた人物や描画の内容などについての説明を求め記録した。

## FDTの分析項目

従来、描画テストの数量的分析には、描画のサイズ、描かれた位置、筆圧などの分析項目を設定し、これらの出現頻度を調査するという方法がよく用いられてきた。家族画でもHulseやPorotがこれを設定しているが、家族画の特徴をすべて網羅しているわけではない。この点、KFDでは使用された色彩の数、人物の出現、最初に描かれた人物、もっとも大きく描かれた人物などの形式面の分析項目と、どのような主題が描かれているかなどの内容面の分析項目が設定されており、より包括的なものとなっている。

今回、われわれはFDTの分析項目を設定するにあたり、まずHulseやPorotなどの家族画と、Burns、日比、加藤、石川などのKFDから分析項目を収集し、さらに臨的に必要と考えられる項目を付け加えて、最終的に30の分析項目を設定した。これらの項目はFDTの特徴をほぼ完全に網羅していると考えられる。なおほとんどの分析項目はFDTを観察して客観的な評価のできる内容であるが、『人物の表情』については臨床経験5年以上の3名の臨床心理士が討議しながら快、不快、表情なし、その他の4つに分類した。

表2は分析項目の定義を示している。各項目は出現頻度を算出する際の母数の違いから、6つの項目群に分類されている。第1群はすべてのFDTを対象にした形式分析の項目であり、第2群は人物が描かれているFDTを対象にした分析項目である。第3群は両親、本人、同胞という家族構成の家庭(以下標準家庭)の児童のFDTで、人物の描かれているものを対象にした分析項目であり、第4群は家族全員が描かれている標準家庭の児童のFDTを対象にした分析項目

表2 分析項目の一覧

<b>&lt;1&gt;すべてのFDTを対象にした形式分析項目 (A1-A10)</b>	
A-1	用紙の使用方向 FDTを描くために用紙をどの方向に用いたかを調べる項目
A-2	使用した色彩の数 FDTを描くのに用いた色彩の数を調べる項目
A-3	描画位置の偏り 描画の全体構成からみて、描かれた描画の位置が用紙の上下左右のどこかに偏っているかどうかを調べる項目
A-4	透明性 壁を通して家の中の様子が描かれているなど、実際には見えないものが透けて見えているように描かれているかどうかを調べる項目
A-5	パースペクティブ 描画に遠近感が表現されているかどうかを調べる項目
A-6	用紙下部の線 用紙の下部に、基線や、土台、床、地面を表す線が描かれているかどうかを調べる項目
A-7	用紙上部の線 用紙の上部や人物全員の上部に、天井や空などを表す線が描かれているかどうかを調べる項目
A-8	抹消 ほぼ完成しかけた描画を最初から描き直したり、何度も修正したかどうかを調べる項目
A-9	人物の欠如 人物の代わりに、動物、草木、凶形、模様などが描かれているかどうかを調べる項目
A-10	文字の記入 絵の説明などのために文字が記入されているかどうかを調べる項目。ただし、カレンダー、時計、テレビのチャンネルなどに用いられた文字は該当しない
<b>&lt;2&gt;人物が描かれているFDTを対象にした分析項目 (B1-B9)</b>	
B-1	区分化 描かれた人物が線などによって区切られているかどうかを調べる項目
B-2	包囲 人物をブランコ、縄跳び、自動車などで囲み、カプセルに詰め込まれたように描いているかどうかを調べる項目
B-3	特定の人物の下線 特定の人物の下に、基線や、土台、床、地面を表す線が描かれているかどうかを調べる項目
B-4	エッジング 人物が用紙の縁にそって描かれているかどうかを調べる項目
B-5	切断 人物の体のどこかの部分が途中までしか描かれていなかったり、用紙の縁で切断されたりしているかどうかを調べる項目
B-6	特定の人物の出現 同居中の家族以外の人物が描かれているかどうかを調べる項目
B-7	グルーピング 家族をいくつかのグループに分けて描いているかどうかを調べる項目
B-8	人物の描き方 人物がどのように描かれているかを調べる項目
B-9	人物の部分の省略 手や足を省略したり、空白の顔を描くなど、人物の体のどこかの部分を省略しているかどうかを調べる項目
<b>&lt;3&gt;人物を描いた標準家庭の児童のFDTを対象にした分析項目 (C1)</b>	
C-1	描かれなかった人物 同居中の家族の中で描かれなかった人物があるかどうかを調べる項目
<b>&lt;4&gt;家族全員が描かれている標準家庭の児童のFDTを対象にした分析項目 (D1-D5)</b>	
D-1	最初に描いた人物 だれを最初に描いたかを調べる項目
D-2	最大の人物 だれをもっとも大きく描いたかを調べる項目で、座位は考慮しない
D-3	最小の人物 だれをもっとも小さく描いたかを調べる項目で、座位は考慮しない
D-4	最近の人物 本人からみてもっとも近い位置に描いている人物はだれかを調べる項目
D-5	最遠の人物 本人からみてもっとも遠い位置に描いている人物はだれかを調べる項目
<b>&lt;5&gt;各々の家族成員を対象にした分析項目 (E1-E2)</b>	
E-1	人物の方向 描かれた人物の顔がどの方向を向いているのかを調べる項目
E-2	人物の表情 描かれた人物の表情を調べる項目。なお表情は3名の臨床心理士が討議しながら、快、不快、表情なし、その他に分類した
<b>&lt;6&gt;FDTの内容に関する分析項目 (F1-F3)</b>	
F-1	場所 FDTの背景としてどのような場所を描いているかを調べる項目
F-2	家族の相互作用 「何かをいっしょにしている」「対立している」など家族の相互関係を調べる項目で、顔や人物が単に並べられているものは「相互作用なし」に分類する
F-3	主題 FDTの主題を分類する項目で、主題が不明確でかつ検査後の質問によっても明らかにできないものは「主題なし」に分類する

目である。第5群は各々の家族成員を対象にした項目であり、第6群はFDTの内容に関する分析項目である。

以上の分析項目の出現頻度を学年別、性別に調査し表に集計した。なお表には小学校1～2年生を低学年群、3～4年生を中学年群、5～6年生を高学年群として、各群の分析項目の出現頻度を掲載した。

## 結 果

小学生380名に実施したFDTにおける30の分析項目の出現頻度は、表3から表11に示すとおりである。

表3は『用紙の使用方向』『色彩の数』など、380名の児童全員のFDTを対象にした形式分析項目(A1—A10)の出現頻度を示している。

表4は『区分化の有無』『包囲の有無』など、人物が描かれていた377名のFDTを対象にした分析項目(B1—B9)の出現頻度を示している。人物を描かなかった3名のうちの2名は家屋だけを描き、残りの1名は部屋と家具しか描いていなかった。

表5は、標準家庭の児童で、かつ人物を描いた344名(男子171名、女子173名)のFDTを対象にした分析項目であり、『描かれなかった人物』(C1)の出現頻度を示している。

表6は、標準家庭の児童で、かつ家族全員を描いた175名(男子85名、女子90名)のFDTを対象にした分析項目(D1—D5)の出現頻度を示している。

表7の『人物の方向』(E1)と、表8の『人物の表情』(E2)は、FDTに描かれた各々の家族を対象にした分析項目である。父親を描いたのは、男子児童が137名で、女子児童が142名であった。母親を描いたのは、男子児童が122名で、女子児童が170名であった。本人を描いたのは、男子児童が132名で、女子児童が153名であった。さらに同胞は、男子児童182名のFDTに205名の同胞が描かれ、同様に女子児童195名のFDTに196名の同胞が描かれていた。

さらに表9から表11はFDTの内容に関する分析項目で、『場所』(F1)、『家族の相互作用』(F2)、『主題』(F3)についての出現頻度を示している。

## 考 察

分析項目の特徴が明確にあらわれているFDTを図示しながら、各項目の出現頻度について検討する。なお図のFDTは今回対象にした一般児童の絵であるが、エッジング、棒状の人物、後ろ向きの人物に関しては、今回の調査でまったくあるいはほとんど出現しなかったことから、これらの説明に用いた図18、図24、図30のFDTは小児心身症の児童のものである。

家族画テストにおける一般児童の特徴（寺嶋・足利・宮島・澤村・田中）

表3 すべてのFDTを対象にした形式分析項目の出現頻度（A1-A10）

低学年群	中学年群		高学年群		全 体	
男(N=79) 女(N=79)	男(N=53) 女(N=56)	男(N=51) 女(N=62)	男(N=183) 女(N=197)			
A-1：用紙の使用方向						
横	78(98.7) 79(100.0)	51(96.2) 54(96.4)	50(98.0) 62(100.0)	179(97.8) 195(99.0)		
縦	1(1.3) 0(0.0)	2(3.8) 2(3.6)	1(2.0) 0(0.0)	4(2.2) 2(1.0)		
斜め	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)		
A-2：使用した色彩の数						
鉛筆のみ	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 7(12.5)	5(9.8) 5(8.1)	5(2.7) 12(6.1)		
1-2色	8(10.1) 1(1.3)	2(3.8) 1(1.8)	6(11.8) 1(1.6)	16(8.7) 3(1.5)		
3-5色	25(31.6) 8(10.1)	21(39.6) 13(23.2)	27(52.9) 27(43.5)	73(39.9) 48(24.4)		
6色以上	46(58.2) 70(88.6)	30(56.6) 35(62.5)	13(25.5) 29(46.8)	89(48.6) 134(68.0)		
A-3：描画位置の偏り						
あり	29(36.7) 14(17.7)	9(17.0) 4(7.1)	7(13.7) 10(16.1)	45(24.6) 28(14.2)		
なし	50(63.3) 65(82.3)	44(83.0) 52(92.9)	44(86.3) 52(83.9)	138(75.4) 169(85.8)		
A-4：透明性						
あり	6(7.6) 1(1.3)	1(1.9) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	7(3.8) 1(0.5)		
なし	73(92.4) 78(98.7)	52(98.1) 56(100.0)	51(100.0) 62(100.0)	176(96.2) 196(99.5)		
A-5：パースペクティブ						
鳥かん図	1(1.3) 1(1.3)	1(1.9) 3(5.4)	0(0.0) 1(1.6)	2(1.1) 5(2.5)		
下から上	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)		
なし	78(98.7) 78(98.7)	52(98.1) 53(94.6)	51(100.0) 61(98.4)	181(98.9) 192(97.5)		
A-6：用紙下部の下線						
あり	11(13.9) 4(5.1)	4(7.5) 0(0.0)	3(5.9) 0(0.0)	18(9.8) 4(2.0)		
なし	68(86.1) 75(94.9)	49(92.5) 56(100.0)	48(94.1) 62(100.0)	165(90.2) 193(98.0)		
A-7：用紙上部の線						
あり	7(8.9) 5(6.3)	1(1.9) 1(1.8)	0(0.0) 0(0.0)	8(4.4) 6(3.1)		
なし	72(91.1) 74(93.7)	52(98.1) 55(98.2)	51(100.0) 62(100.0)	175(95.6) 191(97.0)		
A-8：抹消						
あり	1(1.3) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	0(0.0) 0(0.0)	1(0.5) 0(0.0)		
なし	78(98.7) 79(100.0)	53(100.0) 56(100.0)	51(100.0) 62(100.0)	182(99.5) 197(100.0)		
A-9：人物の欠如						
あり	0(0.0) 0(0.0)	1(1.9) 2(3.6)	0(0.0) 0(0.0)	1(0.5) 2(1.0)		
なし	79(100.0) 79(100.0)	52(98.1) 54(96.4)	51(100.0) 62(100.0)	182(99.5) 195(99.0)		
A-10：文字の記入						
あり	27(34.2) 37(46.8)	5(9.4) 12(21.4)	20(39.2) 22(35.5)	52(28.4) 71(36.0)		
なし	52(65.8) 42(53.2)	48(90.6) 44(78.6)	31(60.8) 40(64.5)	131(71.6) 126(64.0)		

( )内は%

表4 人物が描かれているFDTを対象にした分析項目の出現頻度 (B1-B9)

低学年群		中学年群		高学年群		全 体	
男(N=79)	女(N=79)	男(N=52)	女(N=54)	男(N=51)	女(N=62)	男(N=182)	女(N=195)
B-1: 区分化							
あり	2( 2.5) 2( 2.5)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	2( 1.1) 2( 1.0)	2( 1.0)
なし	77( 97.5) 77( 97.5)	52(100.0) 54(100.0)	51(100.0) 62(100.0)	180( 98.9)	193( 99.0)		
B-2: 包囲							
あり	10( 12.7) 2( 2.5)	0( 0.0) 1( 1.9)	7( 13.7) 0( 0.0)	17( 9.3)	3( 1.5)		
なし	69( 87.3) 77( 97.5)	52(100.0) 53( 98.1)	44( 86.3) 62(100.0)	165( 90.7)	192( 98.5)		
B-3: 特定の人物の下線							
あり	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 1( 1.9)	1( 2.0) 1( 1.6)	1( 0.5)	2( 1.0)		
なし	79(100.0) 79(100.0)	52(100.0) 53( 98.1)	50( 98.0) 61( 98.4)	181( 99.5)	193( 99.0)		
B-4: エッジング							
あり	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)		
なし	79(100.0) 79(100.0)	52(100.0) 54(100.0)	51(100.0) 62(100.0)	182(100.0)	195(100.0)		
B-5: 切断							
あり	4( 5.1) 2( 2.5)	5( 9.6) 5( 9.3)	5( 9.8) 15( 24.2)	14( 7.7)	22( 11.3)		
なし	75( 94.9) 77( 97.5)	47( 90.4) 49( 90.7)	46( 90.2) 47( 75.8)	168( 92.3)	173( 88.7)		
B-6: 特定の人物の出現							
あり	1( 1.3) 1( 1.3)	0( 0.0) 0( 0.0)	1( 2.0) 0( 0.0)	2( 1.1)	1( 0.5)		
なし	78( 98.7) 78( 98.7)	52(100.0) 54(100.0)	50( 98.0) 62(100.0)	180( 98.9)	194( 99.5)		
B-7: グルーピング							
あり	7( 8.9) 5( 6.3)	3( 5.8) 5( 9.3)	4( 7.8) 0( 0.0)	14( 7.7)	10( 5.1)		
なし	72( 91.1) 74( 93.7)	49( 94.2) 49( 90.7)	47( 92.2) 62(100.0)	168( 92.3)	185( 94.9)		
B-8: 人物の描き方							
普通	79(100.0) 79(100.0)	52(100.0) 54(100.0)	51(100.0) 62(100.0)	182(100.0)	195(100.0)		
棒状	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)		
陰影	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)		
その他	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0) 0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)		
B-9: 人物の部分の省略							
あり	4( 5.1) 6( 7.6)	2( 3.8) 3( 5.6)	0( 0.0) 4( 6.5)	6( 3.3)	13( 6.7)		
なし	75( 94.9) 73( 92.4)	50( 96.2) 51( 94.4)	51(100.0) 58( 93.5)	176( 96.7)	182( 93.3)		

( )内は%

表5 人物を描いた標準家庭の児童のFDTを対象にした分析項目の出現頻度 (C1)

低学年群		中学年群		高学年群		全 体	
男(N=75)	女(N=66)	男(N=47)	女(N=53)	男(N=49)	女(N=54)	男(N=171)	女(N=173)
C-1: 描かれなかった人物							
あり	26( 34.7) 22( 33.3)	24( 51.1) 27( 50.9)	36( 73.5) 34( 63.0)	86( 50.3)	83( 48.0)		
なし	49( 65.3) 44( 66.7)	23( 48.9) 26( 49.1)	13( 26.5) 20( 37.0)	85( 49.7)	90( 52.0)		
*描かれなかった人物の内訳							
父親	12( 46.2) 13( 59.1)	12( 50.0) 17( 63.0)	21( 58.3) 19( 55.9)	45( 52.3)	49( 59.0)		
母親	19( 73.1) 6( 27.3)	15( 62.5) 8( 29.6)	26( 72.2) 12( 35.3)	60( 69.8)	26( 31.3)		
本人	13( 50.0) 3( 13.6)	10( 41.7) 18( 66.7)	20( 55.6) 20( 58.8)	43( 50.0)	41( 49.4)		
同胞	20( 76.9) 12( 54.5)	18( 75.0) 17( 63.0)	25( 69.4) 24( 70.6)	63( 73.3)	53( 63.9)		

( )内は%



家族画テストにおける一般児童の特徴（寺嶋・足利・宮島・澤村・田中）

表 6 家族全員が描かれている標準家庭の児童の FDT を対象にした分析項目の出現頻度（D1-D5）

	低学年群		中学年群		高学年群		全 体	
	男(N=49)	女(N=44)	男(N=23)	女(N=26)	男(N=13)	女(N=20)	男(N=85)	女(N=90)
D-1：最初に描いた人物								
父親	18(36.7)	16(36.4)	7(30.4)	2(7.7)	9(69.2)	7(35.0)	34(40.0)	25(27.8)
母親	5(10.2)	12(27.3)	7(30.4)	13(50.0)	2(15.4)	4(20.0)	14(16.5)	29(32.2)
本人	15(30.6)	11(25.0)	5(21.7)	5(19.2)	1(7.7)	2(10.0)	21(24.7)	18(20.0)
同胞	9(18.4)	4(9.1)	4(17.4)	6(23.1)	1(7.7)	7(35.0)	14(16.5)	17(18.9)
その他	2(4.1)	1(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(2.4)	1(1.1)
D-2：最大の人物								
父親	24(49.0)	18(40.9)	9(39.1)	8(30.8)	6(46.2)	5(25.0)	39(45.9)	31(34.4)
母親	16(32.7)	18(40.9)	8(34.8)	14(53.8)	3(23.1)	6(30.0)	27(31.8)	38(42.2)
本人	6(12.2)	3(6.8)	3(13.0)	4(15.4)	1(7.7)	4(20.0)	10(11.8)	11(12.2)
同胞	2(4.1)	4(9.1)	3(13.0)	0(0.0)	3(23.1)	5(25.0)	8(9.4)	9(10.0)
その他	1(2.0)	1(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.2)	1(1.1)
D-3：最小の人物								
父親	1(2.0)	3(6.8)	4(17.4)	3(11.5)	2(15.4)	2(10.0)	7(8.2)	8(8.9)
母親	4(8.2)	1(2.3)	2(8.7)	1(3.8)	2(15.4)	1(5.0)	8(9.4)	3(3.3)
本人	13(26.5)	8(18.2)	7(30.4)	9(34.6)	3(23.1)	6(30.0)	23(27.1)	23(25.6)
同胞	29(59.2)	30(68.2)	9(39.1)	12(46.1)	5(38.5)	11(55.0)	43(50.6)	53(58.9)
その他	2(4.1)	2(4.5)	1(4.3)	1(3.8)	1(7.7)	0(0.0)	4(4.7)	3(3.3)
D-4：最近の人物								
父親	8(16.3)	4(9.1)	5(21.8)	9(34.6)	5(38.5)	4(20.0)	18(21.2)	17(18.9)
母親	10(20.4)	16(36.4)	6(26.1)	6(23.1)	2(15.4)	3(15.0)	18(21.2)	25(27.8)
同胞	29(59.2)	23(52.3)	12(52.2)	11(42.3)	6(46.2)	11(55.0)	47(55.3)	45(50.0)
その他	2(4.1)	1(2.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(10.0)	2(2.4)	3(3.3)
D-5：最遠の人物								
父親	23(46.9)	25(56.8)	8(34.8)	8(30.8)	4(30.8)	9(45.0)	35(41.2)	42(46.7)
母親	13(26.5)	9(20.5)	8(34.8)	9(34.6)	1(7.7)	6(30.0)	22(25.9)	24(26.7)
同胞	11(22.4)	8(18.2)	5(21.7)	8(30.8)	8(61.5)	4(20.0)	24(28.2)	20(22.2)
その他	2(4.1)	2(4.5)	2(8.7)	1(3.8)	0(0.0)	1(5.0)	4(4.7)	4(4.4)

( )内は%

表7 各々の家族成員を対象にした分析項目の出現頻度—人物の方向 (E1)

低学年群		中学年群		高学年群		全 体		
E-1: 人物の方向 (父親)								
男(N=67) 女(N=63)		男(N=40) 女(N=39)		男(N=30) 女(N=40)		男(N=137) 女(N=142)		
正面	63( 94.0)	60( 95.2)	33( 82.5)	37( 94.9)	25( 83.3)	36( 90.0)	121( 88.3)	133( 93.7)
横	4( 6.0)	3( 4.8)	7( 17.5)	2( 5.1)	3( 10.0)	3( 7.5)	14( 10.2)	8( 5.6)
後ろ	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	2( 6.7)	1( 2.5)	2( 1.5)	1( 0.7)
その他	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)
E-1: 人物の方向 (母親)								
男(N=60) 女(N=73)		男(N=37) 女(N=48)		男(N=25) 女(N=49)		男(N=122) 女(N=170)		
正面	59( 98.3)	69( 94.5)	33( 89.2)	44( 91.7)	20( 80.0)	47( 95.9)	112( 91.8)	160( 94.1)
横	1( 1.7)	3( 4.1)	4( 10.8)	4( 8.3)	2( 8.0)	1( 2.0)	7( 5.7)	8( 4.7)
後ろ	0( 0.0)	1( 1.4)	0( 0.0)	0( 0.0)	2( 8.0)	1( 2.0)	2( 1.6)	2( 1.2)
その他	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 4.0)	0( 0.0)	1( 0.8)	0( 0.0)
E-1: 人物の方向 (本人)								
男(N=64) 女(N=75)		男(N=40) 女(N=37)		男(N=28) 女(N=41)		男(N=132) 女(N=153)		
正面	59( 92.2)	71( 94.7)	33( 82.5)	33( 89.2)	25( 89.3)	38( 92.7)	117( 88.6)	142( 92.8)
横	5( 7.8)	3( 4.0)	7( 17.5)	2( 5.4)	1( 3.6)	1( 2.4)	13( 9.8)	6( 3.9)
後ろ	0( 0.0)	1( 1.3)	0( 0.0)	2( 5.4)	2( 7.1)	2( 4.9)	2( 1.5)	5( 3.3)
その他	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)
E-1: 人物の方向 (同胞)								
男(N=100) 女(N=87)		男(N=57) 女(N=61)		男(N=48) 女(N=48)		男(N=205) 女(N=196)		
正面	96( 96.0)	84( 96.6)	51( 89.5)	56( 91.8)	41( 85.4)	42( 87.5)	188( 91.7)	182( 92.9)
横	2( 2.0)	3( 3.4)	6( 10.5)	4( 6.6)	3( 6.3)	4( 8.3)	11( 5.4)	11( 5.6)
後ろ	2( 2.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 1.7)	4( 8.3)	2( 4.2)	6( 2.9)	3( 1.5)
その他	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)

( )内は%

家族画テストにおける一般児童の特徴（寺嶋・足利・宮島・澤村・田中）

表8 各々の家族成員を対象にした分析項目の出現頻度—人物の表情（E2）

	低学年群		中学年群		高学年群		全 体	
E-2：人物の表情（父親）								
	男(N=67) 女(N=63)		男(N=40) 女(N=39)		男(N=30) 女(N=40)		男(N=137) 女(N=142)	
快	50( 74.6)	54( 85.7)	19( 47.5)	19( 48.7)	10( 33.3)	13( 32.5)	79( 57.7)	86( 60.6)
不快	4( 6.0)	0( 0.0)	1( 2.5)	1( 2.6)	4( 13.3)	0( 0.0)	9( 6.6)	1( 0.7)
表情なし	4( 6.0)	6( 9.5)	8( 20.0)	11( 28.2)	7( 23.3)	17( 42.5)	19( 13.9)	34( 23.9)
その他	9( 13.4)	3( 4.8)	12( 30.0)	8( 20.5)	9( 30.0)	10( 25.0)	30( 21.9)	21( 14.8)
E-2：人物の表情（母親）								
	男(N=60) 女(N=73)		男(N=37) 女(N=48)		男(N=25) 女(N=49)		男(N=122) 女(N=170)	
快	46( 76.7)	64( 87.7)	21( 56.8)	21( 43.8)	6( 24.0)	21( 42.9)	73( 59.8)	106( 62.4)
不快	2( 3.3)	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 2.1)	1( 4.0)	2( 4.1)	3( 2.5)	3( 1.8)
表情なし	4( 6.7)	4( 5.5)	9( 24.3)	17( 35.4)	10( 40.0)	16( 32.7)	23( 18.9)	37( 21.8)
その他	8( 13.3)	5( 6.8)	7( 18.9)	9( 18.8)	8( 32.0)	10( 20.4)	23( 18.9)	24( 14.1)
E-2：人物の表情（本人）								
	男(N=64) 女(N=75)		男(N=40) 女(N=37)		男(N=28) 女(N=41)		男(N=132) 女(N=153)	
快	48( 75.0)	66( 88.0)	21( 52.5)	17( 45.9)	10( 35.7)	19( 46.3)	79( 59.8)	102( 66.7)
不快	4( 6.3)	0( 0.0)	1( 2.5)	1( 2.7)	2( 7.1)	2( 4.9)	7( 5.3)	3( 2.0)
表情なし	4( 6.3)	4( 5.3)	9( 22.5)	9( 24.3)	8( 28.6)	9( 22.0)	21( 15.9)	22( 14.4)
その他	8( 12.5)	5( 6.7)	9( 22.5)	10( 27.0)	8( 28.6)	11( 26.8)	25( 18.9)	26( 17.3)
E-2：人物の表情（同胞）								
	男(N=100) 女(N=87)		男(N=57) 女(N=61)		男(N=48) 女(N=48)		男(N=205) 女(N=196)	
快	80( 80.0)	75( 86.2)	30( 52.6)	25( 41.0)	17( 35.4)	15( 31.3)	127( 62.0)	115( 58.7)
不快	3( 3.0)	0( 0.0)	2( 3.5)	1( 1.6)	1( 2.1)	3( 6.3)	6( 2.9)	4( 2.0)
表情なし	3( 3.0)	5( 5.7)	8( 14.0)	18( 29.5)	18( 37.5)	11( 22.9)	29( 14.1)	34( 17.3)
その他	14( 14.0)	7( 8.0)	17( 29.8)	17( 27.9)	12( 25.0)	19( 39.6)	43( 21.0)	43( 21.9)

( )内は%

表9 FDTの内容に関する分析項目の出現頻度—場所（F1）

	低学年群		中学年群		高学年群		全 体	
	男(N=79) 女(N=79)		男(N=53) 女(N=56)		男(N=51) 女(N=62)		男(N=183) 女(N=197)	
F-1：場所								
なし	55( 69.6)	62( 78.5)	36( 67.9)	26( 46.4)	33( 64.7)	40( 64.5)	124( 67.8)	128( 65.0)
あり	24( 30.4)	17( 21.5)	17( 32.1)	30( 53.6)	18( 35.3)	22( 35.5)	59( 32.2)	69( 35.0)
	男(N=26) 女(N=18)		男(N=25) 女(N=35)		男(N=21) 女(N=28)		男(N=72) 女(N=81)	
*場所の内訳								
戸外	10( 38.5)	10( 55.6)	10( 40.0)	5( 14.3)	6( 28.6)	7( 25.0)	26( 36.1)	22( 27.2)
自然	0( 0.0)	4( 22.2)	0( 0.0)	3( 8.6)	4( 19.0)	2( 7.1)	4( 5.6)	9( 11.1)
居間	10( 38.5)	2( 11.1)	8( 32.0)	15( 42.9)	6( 28.6)	8( 28.6)	24( 33.3)	25( 30.9)
本人の部屋	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 4.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 3.6)	1( 1.4)	1( 1.2)
台所	0( 0.0)	1( 5.6)	2( 8.0)	5( 14.3)	0( 0.0)	4( 14.3)	2( 2.8)	10( 12.3)
職場	1( 3.8)	0( 0.0)	1( 4.0)	0( 0.0)	1( 4.8)	3( 10.7)	3( 4.2)	3( 3.7)
その他	5( 19.2)	1( 5.6)	3( 12.0)	7( 20.0)	4( 19.0)	3( 10.7)	12( 16.7)	11( 13.6)

( )内は%

表10 FDTの内容に関する分析項目の出現頻度—家族の相互作用 (F2)

	低学年群		中学年群		高学年群		全 体	
	男(N=79)	女(N=79)	男(N=53)	女(N=56)	男(N=51)	女(N=62)	男(N=183)	女(N=197)
F-2: 家族の相互作用								
別々の動作	3( 3.8)	2( 2.5)	7( 13.2)	6( 10.7)	6( 11.8)	6( 9.7)	16( 8.7)	14( 7.1)
一緒にいても	7( 8.9)	9( 11.4)	9( 17.0)	14( 25.0)	9( 17.6)	15( 24.2)	25( 13.7)	38( 19.3)
対立	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)	0( 0.0)
その他	2( 2.5)	0( 0.0)	1( 1.9)	1( 1.8)	0( 0.0)	1( 1.6)	3( 1.6)	2( 1.0)
なし	67( 84.8)	68( 86.1)	36( 67.9)	35( 62.5)	36( 70.6)	40( 64.5)	139( 76.0)	143( 72.6)

( )内は%

表11 FDTの内容に関する分析項目の出現頻度—主題 (F3)

	低学年群		中学年群		高学年群		全 体	
	男(N=79)	女(N=79)	男(N=53)	女(N=56)	男(N=51)	女(N=62)	男(N=183)	女(N=197)
F-3: 主題								
なし	19( 24.1)	8( 10.1)	14( 26.4)	12( 21.4)	25( 49.0)	21( 33.9)	58( 31.7)	41( 20.8)
あり	60( 75.9)	71( 89.9)	39( 73.6)	44( 78.6)	26( 51.0)	41( 66.1)	125( 68.3)	156( 79.2)
	男(N=62) 女(N=73)		男(N=54) 女(N=55)		男(N=35) 女(N=50)		男(N=151) 女(N=178)	
* 主題の内訳								
仕事	1( 1.6)	0( 0.0)	1( 1.9)	3( 5.5)	2( 5.7)	4( 8.0)	4( 2.6)	7( 3.9)
勉強	0( 0.0)	0( 0.0)	2( 3.7)	0( 0.0)	0( 0.0)	3( 6.0)	2( 1.3)	3( 1.7)
レクリエーション	12( 19.4)	10( 13.7)	13( 24.1)	5( 9.1)	15( 42.9)	12( 24.0)	40( 26.5)	27( 15.2)
休憩	1( 1.6)	1( 1.4)	3( 5.6)	3( 5.5)	3( 8.6)	2( 4.0)	7( 4.6)	6( 3.4)
食事	2( 3.2)	2( 2.7)	0( 0.0)	7( 12.7)	2( 5.7)	5( 10.0)	4( 2.6)	14( 7.9)
家事	1( 1.6)	1( 1.4)	3( 5.6)	8( 14.5)	2( 5.7)	5( 10.0)	6( 4.0)	14( 7.9)
就寝	0( 0.0)	0( 0.0)	1( 1.9)	1( 1.8)	1( 2.9)	0( 0.0)	2( 1.3)	1( 0.6)
立っている	42( 67.7)	59( 80.8)	27( 50.0)	22( 40.0)	5( 14.3)	13( 26.0)	74( 49.0)	94( 52.8)
その他	3( 4.8)	0( 0.0)	4( 7.4)	6( 10.9)	5( 14.3)	6( 12.0)	12( 7.9)	12( 6.7)

( )内は%

<1>すべてのFDTを対象にした形式分析項目

以下の項目は380名のすべての児童のFDTを対象にした分析項目である。

A-1. 用紙の使用方向

図1は用紙を縦に用いた6歳の児童のFDTである。このようなFDTは全児童380名中わずかに6名(1.6%)の児童にみられただけで、残りの374名(98.4%)の児童は教示にしたがって用紙を横に使用していた。臨床場面では、教示を無視して用紙を縦に用いるのは被検者がテストに非協力的であったり、敵意を抱いていることを示すと考えられている。しかし今回、用紙を縦に使用した6名の児童には、いずれも学校生活で大きな問題は認められなかった。ただ共通してやや落ちつきのない面がみられることから、これらの児童は教示を十分に聞かずに不注意から用紙を縦に用いた可能性が考えられる。

A-2. 使用した色彩の数

図2は11歳の男子児童のFDTで、鉛筆だけで描かれている。このような描画は380名中17名

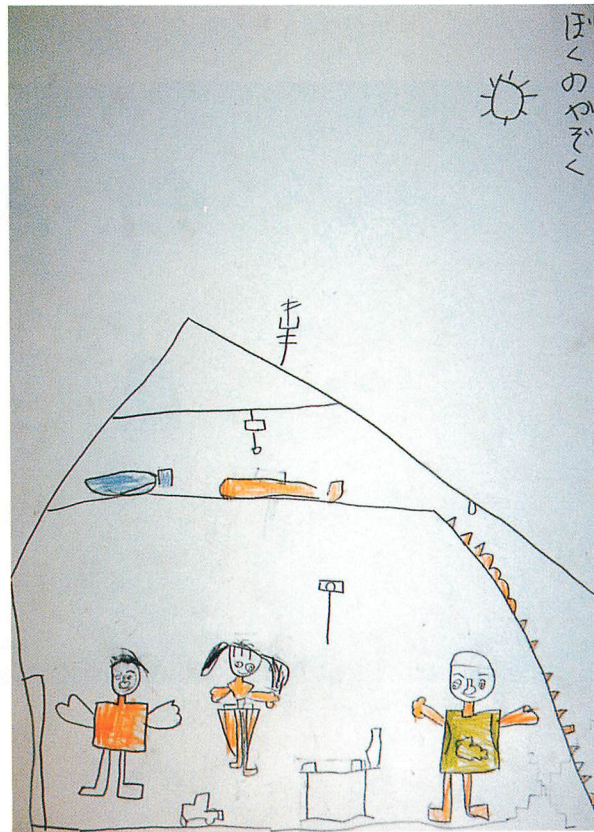


図1 用紙の縦の使用



図2 使用した色彩（単色）



図3 使用した色彩（3色以上）



図4 使用した色彩（6色以上）

（4.5%）にしかみられず、残りの344名（90.5%）の児童は、図3（11歳女子児童）のように3色以上の色彩を用いて描いていた。単色で描かれるFDTは一般児童にあらわれにくいようである。

また図4（6歳男子児童）のように低学年群の児童の中に、きわめて多くの色彩（6色以上）を用いる者が目立ったが、これは加齢とともに減少し、むしろ高学年群では数種類の色彩を適切に用いて絵を描く者（図3）が増える傾向にあった。これは高学年になるにつれて、外界を客観的に認知し、情緒や欲求への統制力が発達することを反映していると考えられる。したがって、過度に多くの色彩を用いるのは幼児性の指標と考えられる。

### A-3. 描画位置の偏り

図5は8歳の女子児童のFDTで、家族が左上部に偏って描かれている。このように描画の位置が用紙の上下左右のどこかに偏っていたのは380名中73名（19.2%）のFDTにみられたが、残りの307名の児童は用紙の中央あるいはやや左よりに絵を描いていた。偏りがみられた73名のFDTをみると、用紙の左側に偏っている描画がもっとも多く（73名中43名、58.9%）、特にこの傾向は低学年群の児童のFDTに目立った。

樹木画の偏りについて調査した高橋（1980）は『日本人の場合、男女に関係なく被検者は中央よりもやや左よりに描くことが多い』とし、この理由として『漢字の筆順が左から始まること』や『横書きの文章は左から書き始めること』といった、日本語の特徴をあげている。確かにこれらが絵画を描くときに影響することは十分に考えられることである。しかし今回の調査では低学年群の児童ほど左に偏ったFDTを描きやすく、これが単に日本語の特徴からだけで生じているとは考えにくい。GrünwaldやBolanderなどの空間象徴理論によると、描画用紙の左側は母親、女性性、依存などを象徴する空間であり、低学年群の左よりの絵は母親への依存の強さをあらわしているのかもしれない。

### A-4. 透明性

図6は7歳の男子児童のFDTで、家の壁を通して内部が描かれている。このような透明性のあらわれた描画は、低学年群の7名と中学年群の1名の計8名（2.1%）の児童に出現したが、高学年群にはまったく認められなかった。

家屋画などで家の壁を通して電灯や家具が描かれる透明性は、判断力が低下し自己と外界を明確に区別できない精神病の患者にあらわれやすく、病的指標と考えられてきた。しかし高橋は、就学前の幼児は現実吟味力が十分に確立されていないために透明性が出現することがあるとしている。今回の資料でも、低学年群の児童を中心に透明性があらわれ、現実吟味力が未発達で外界を主観的に眺めている児童がわずかながら存在するようである。

#### A-5. パースペクティブ

図7は10歳の女子児童のFDTで、食事の風景が鳥瞰図式に描かれている。このようにパースペクティブのみられる絵は380名中7名(1.8%)の児童にしか出現せず、すべて鳥瞰図式の描画であった。従来、距離感のある絵は被検者が生活環境に十分になじんでいないことをあらわすとされており、この解釈仮説からみても一般児童には出現しにくい特徴と考えられる。

#### A-6. 用紙下部の線

図8は7歳の女子児童のFDTで、用紙の下部に地面の線が描かれている。人物画テストや樹木画テストなどにあらわれる用紙下部の線は、先のFDTと同じく地面の線として描かれることが多く、Jolles、高橋、日比らは、これらの下線を不安の指標と解釈している。今回の調査で、用紙の下部に線を描いた児童は、380名中22名(5.8%)であり、特に低学年群の児童のFDTに多く(15名)みられた。6歳から7歳ころは幼児期から児童期への過渡期で、家庭から学校へと生活空間が飛躍的に拡大する時期でもある。このような環境の著しい変化の中で、不安や緊張を抱く児童が多いことを、今回の結果は示唆しているのかもしれない。

#### A-7. 用紙上部の線

図9は7歳の男子児童のFDTで用紙の上部に天井の線が描かれている。このような用紙上部の線も下部の線と同じく、激しい不安をあらわすと解釈されてきた。今回の調査では、低学年群の12名(7.6%)と中学年群の2名(1.8%)の14名の児童にみられ、やはり低学年群に多く出現した。これも先の理由から、低学年群の児童の中に不安の高い者が多いことを示唆していると考えられる。なお図10(7歳女子児童)のように用紙上部の線が雲としてあらわれる場合もあり、これも図9の上部の線と同様に不安の象徴と解釈できるか否かについては今後さらに検討する必要があるだろう。

#### A-8. 抹消

図11は7歳の男子児童のFDTで、最初、左側と中央の人物の間に兄を描いたが、途中で完全に消してしまった。このような抹消は380名中1名にしか認められなかった。日比は、『描いた人物を抹消したり省略するのは、その人物を他の家族と同じ場所に置き難いほどの敵意や、不安などの否定的感情を抱いている被検者に生じる』と述べており、この見解からみても臨臨床的な意味の強い分析項目で、一般児童にはきわめて生じにくいようである。

#### A-9. 人物の欠如

図12は9歳の男子児童のFDTで、家具だけが描かれている。このように人物の欠如したFDTは380名中わずかに3名(0.8%)にしかみられず、動物や家屋などを描いていた。FDTで



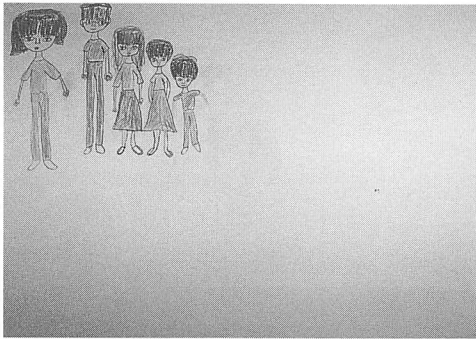


図5 描画位置の偏り



図6 透明性

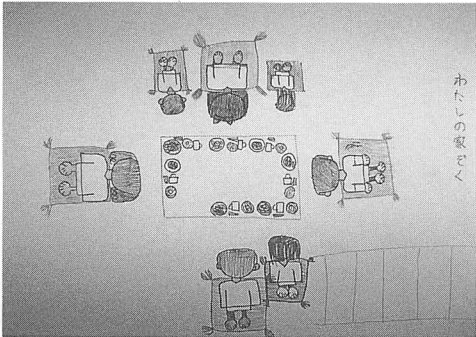


図7 パースペクティブ



図8 用紙下部の線

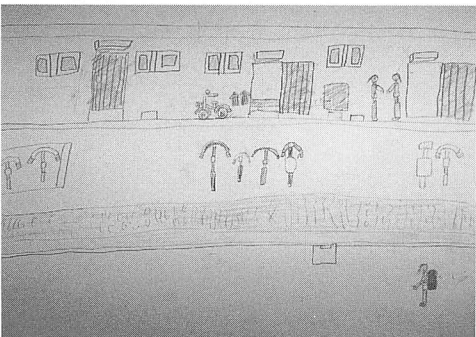


図9 用紙上部の線



図10 用紙上部の線（雲）

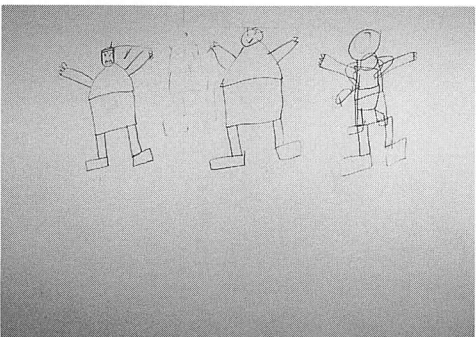


図11 末梢

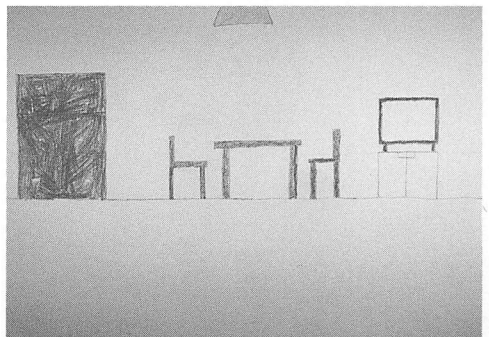


図12 人物の欠如



図13 人物の欠如（家族を動物で表現したもの）

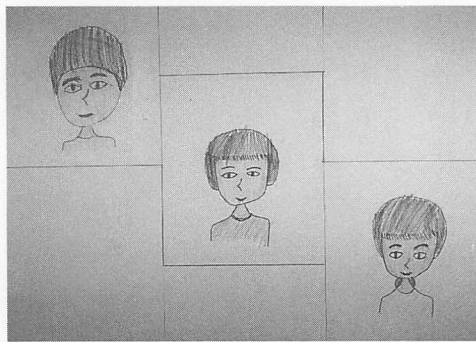


図14 区分化

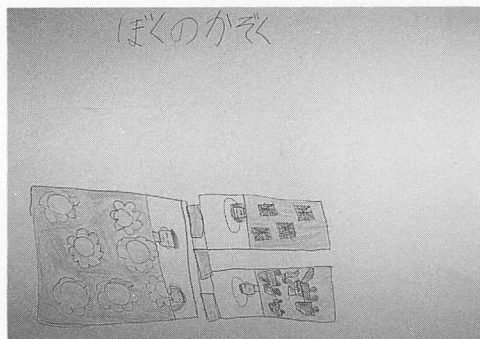


図15 包囲



図16 縄跳びによる包囲

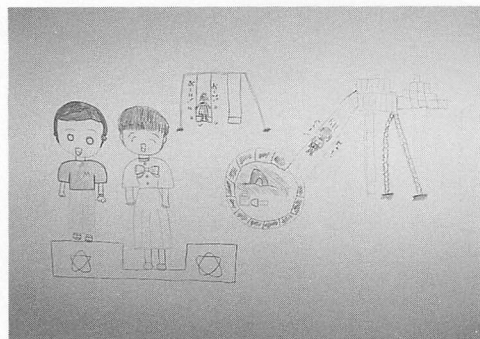


図17 特定人物の下線

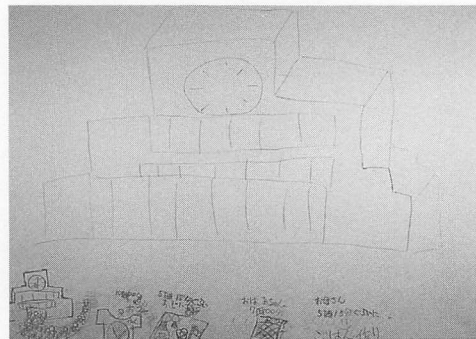


図18 エッジング

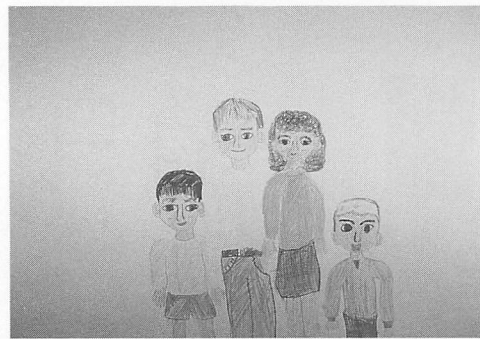


図19 切断

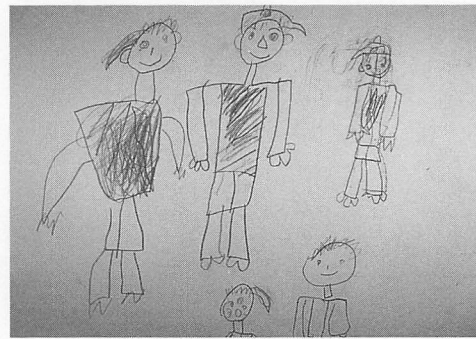


図20 切断

は、KFDのような『家族全員を描くように』という教示を用いないために、人物を描くか否かの選択は被検者の意志にゆだねられている。しかし今回、一般児童のほぼ全員が人物を普通に描いていることから、人物をまったく描かないのは家族関係あるいは人間関係で葛藤を生じている可能性を示すのかもしれない。ただ、同じように人物の欠如に分類される絵でも、家具や家屋だけで生物がまったく描かれていないものと、動物などで家族を表現している場合とではその解釈も異なると考えられる。例えば図13は10歳の女子児童のFDTで、家族を動物で表現し、描画後『ライオンの一家で、子どもが遊んでいるところ。オレンジ色で描いたのは暖かい家族だから』と説明しており、家族の交流がうかがえる描画である。これに対して先の図12の絵を描いた児童は『みんな出かけていて家には誰もいない』と話し、家族相互の交流の乏しさがあらわれている。このように人物の欠如したFDTを解釈する場合には、絵の内容や被検者の説明を十分に考慮する必要がある。

#### A-10. 文字の記入

図10にみられるような文字の記入は380名中123名（32.4%）の児童のFDTに認められ、もっとも多いのが『わたし（ぼく）のかぞく』という文字の記入で、『おとうさん』『おかあさん』『わたし（ぼく）』などと家族を説明するための文字の記入もみられた。臨床場面では精神分裂病や躁病の患者の描画テストに文字の記入がよくみられることから、思考障害や統制力の低下を示唆する不適應の指標と考えられてきた。しかし今回の調査では約3人に1人が文字を記入しており、児童の場合、文字の記入は特に不適應の指標とは考えられない。

### <2>人物が描かれているFDTを対象にした分析項目

以下の分析項目は人物が描かれているFDTを対象にしたもので、今回の調査では377名（男子182名、女子195名）のFDTがこれに該当した。

#### B-1. 区分化

図14は8歳の女子児童のFDTで、家族が線で明確に区切られている。このように区分化されたFDTは低学年群の4名（1.1%）にみられただけで、他の学年には出現せず、一般児童のFDTにはあらわれにくい特徴と考えられる。ところで加藤が6歳から12歳までの767名の児童のKFDを調査した結果、区分化の出現率は約4%であり、また日比の調査では16.7%であった。このようにKFDに区分化があらわれやすいのは、『家族の人たちが何かしているところ』という教示を用いるために、家族が各々別の動作をしているところが描かれやすく、付随して区分化が生じやすいと考えられる。なおBurnsとKaufmanがアメリカの児童のKFDを対象に行った調査では、区分化の出現率が約20%に達し、日本に比べて高い値を示した。西洋社会では、幼少期から子どもに両親と別の寝室が用意されるなど、両親と子どもの生活空間が区切られて

おり、アメリカにおける区分化の高い出現率は個人志向型の生活スタイルを反映していると考えられる。

## B-2. 包囲

図15は7歳の男子児童のFDTで、布団をあらわす線によって人物がカプセルの中に入っているかのように描かれている。このような包囲は377名中20名(5.3%)の児童のFDTに出現した。健常児のKFDにおける包囲の出現率については、加藤が約12%という値を示し、また日比は64.4%ときわめて高い値を報告している。KFDでは運動性を付加するために、図16の縄跳びや図17のブランコなど、包囲とみなされるテーマが選択されやすく、FDTよりも高い出現率を示すと考えられる。

なおBurnsは包囲が孤独感や疎外感に結びつく指標であるとしているが、同じ包囲でも図15と図16とでは絵の全体的な印象が異なり、特に図16の包囲などはBurnsの解釈に相当するかどうかは疑問であり、描画の全体構成を考慮しながら解釈する必要があるだろう。

## B-3. 特定の人物の下線

図17は9歳の女子児童のFDTで、左側の2人の人物の下に台が描かれている。このように特定の人物の下線として分類されるFDTは中学年群の女子児童の1名と、高学年群の男女各1名の合計3名(0.1%)の児童にみられたただけであった。KFDを対象にした日比や加藤らの調査でも約8%に下線が出現しただけであり、FDT、KFDともに健常児にはあらわれにくい特徴と考えられる。なおKFDに比べてFDTにおける出現率がきわめて低いのは、FDTでは人物が集合しているところが描かれやすいために、特定の人物の下にだけ線を描くよりも、図8のように用紙下部の線としてあらわれやすいからであろう。

## B-4. エッジング

図18は11歳の小児心身症の女子児童が描いたFDTで、用紙の縁にそって絵が描かれている。このようなエッジングは今回対象にした一般児童にはあらわれなかった。KFDにおけるエッジングの出現率について、日比は約18%、加藤は約3%という値を報告している。両者の値にかなりの差がみられるが、これはエッジングに関する定義の相違によるところが大きい。つまり加藤やBurnsは人物が全員周囲に描かれているものをエッジングとしているが、日比は人物が1人でも用紙の周囲にそって描かれていれば、これをエッジングとしており、当然、後者の出現率が高くなることが予想される。われわれは後者の立場を採用して出現頻度を調査したが、今回はまったく認められなかった。エッジングは防衛的で激しい不安を生じている被検者にあられやすいという従来の解釈仮説からみても、一般児童のFDTにはきわめて出現しにくい特徴であろう。

### B-5. 切断

図19は10歳の女子児童のFDTであり、人物の足が用紙の縁で切断されている。また図20は6歳の男子児童のFDTで、弟と妹が用紙の縁で切断されている。このように切断のあらわれたFDTは377名中36名（9.5%）に認められた。人物画などにみられる切断は、被検者が用紙のサイズや描く位置を十分に考慮することなく描画を開始するために、描画像が用紙に収まりきらずに生じると考えられる。したがって切断は計画性に乏しく、刺激に対して直ちに反応しやすい傾向を示し、非行少年にあらわれやすいことはよく知られている。児童の場合も同じ傾向が認められることから、図20のような切断の多くはこの理由から生じたと考えられる。しかし図19の10歳の女子児童は時間をかけて丁寧に絵を描いており、必ずしも衝動性が高いとは考えにくい。むしろ足を描くことへの無意識の抵抗から生じた可能性もあり、自主的に独立した行動をとることへの不安が強いのかもかもしれない。このように高学年で生じる切断については切断された部分の象徴的意味を考慮した上で解釈するのが妥当であろう。

### B-6. 特定の人物の出現

図21は6歳の男子児童のFDTで、同居していない祖父母が描かれている。今回、同居以外の人物を描いたのは、低学年群の男女各々1名と、高学年群の男子児童1名だけであり、いずれも祖父あるいは祖母が描かれていた。

日比はKFDで描かれる家族以外の人物のほとんどが、本人の友達であると述べ、今回の結果とは異なっている。KFDでは絵に運動的要素を求めるために、友達と遊んでいるところなどの主題が選ばれやすく、結果的に友達が描かれやすいのかもかもしれない。一方FDTでは『私の家族』という課題を用いるために、被検者が家族と認識している人物が中心となり、この点でKFDと異なっている。したがってFDTで被検者がわざわざ他人を描いている場合は、この人物が被検者にとって特に重要な存在であることを示すと考えられる。

### B-7. グルーピング

図22は10歳の男子児童のFDTである。この絵では左側の両親と右側の3人の兄弟で、2つのグループが構成されている。また図16でも、両親と兄弟という2つのグループがみられる。さらに図23は7歳の男子児童のFDTで、父親と兄、母親と本人という左右2つのグループがみられる。このようなグルーピングのみられるFDTは377名中24名（6.4%）にみられただけで、残りの353名（93.6%）のFDTにはみられなかった。グルーピングは被検者が家族を1つの集団としてとらえているのではなく、いくつかのまとまりとして認知していることを示すが、一般児童にはこのような認知をしている者はきわめて少ないようである。なお、グルーピングの人物構成を調査すると、低学年群では本人・母親とそれ以外の家族というグループが形成されやすく、中学年群から高学年群では両親と同胞という2つのグループが形成される傾向があった。

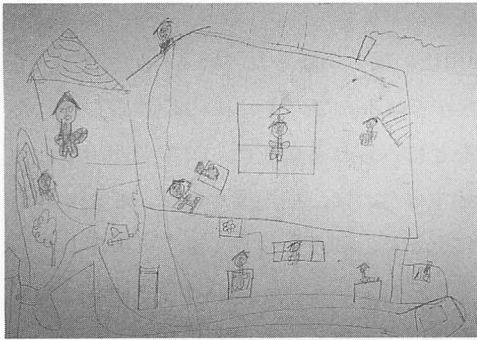


図21 特定人物の出現

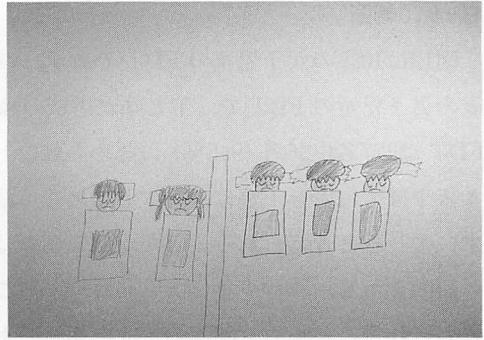


図22 グループング

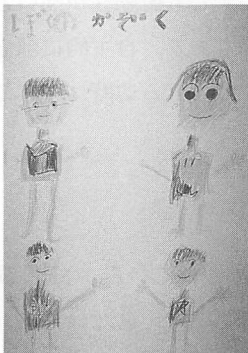


図23 グループング

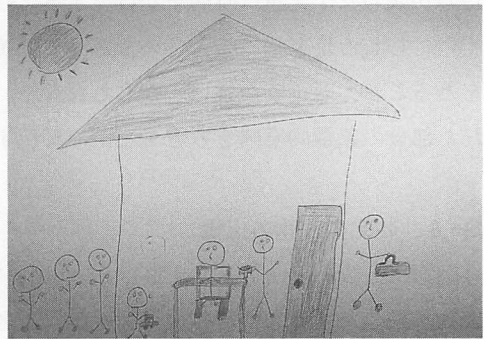


図24 人物の描き方(棒状の人物)



図25 人物の部分の省略



図26 人物の部分の省略

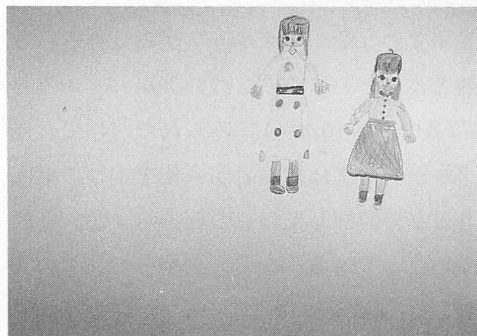


図27 描かれなかった人物

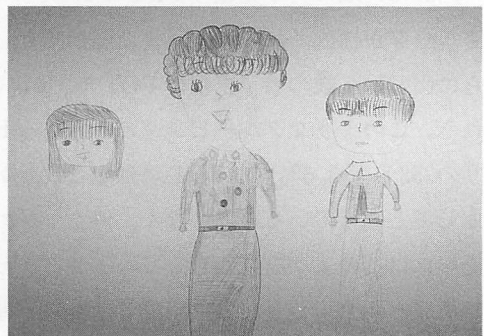


図28 最大の人物

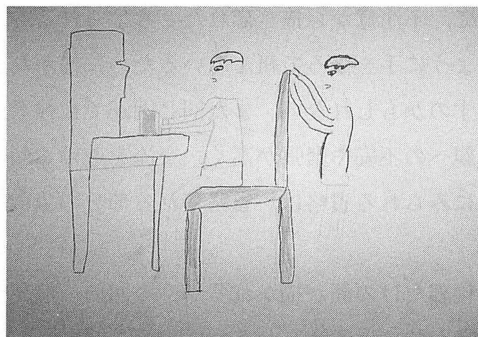


図29 人物の方向（横向き）

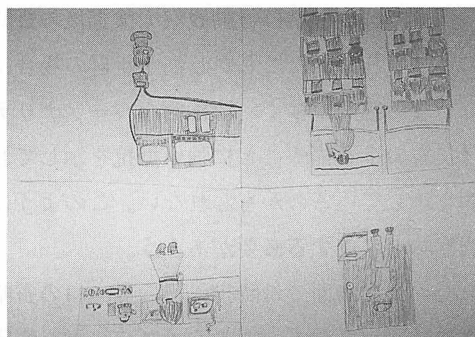


図30 人物の方向（後向き）および場所

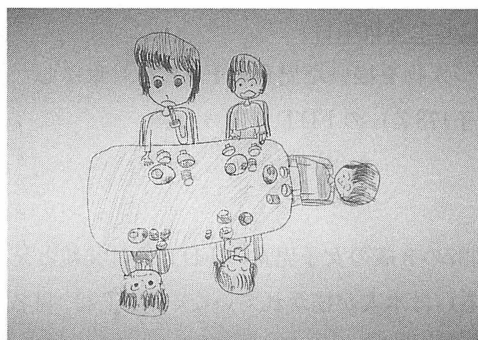


図31 相互作用

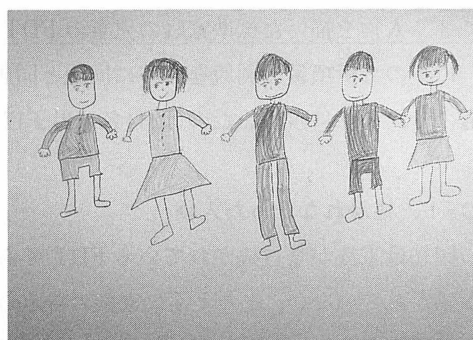


図32 相互作用

これは、低学年の児童ほど母親への愛着が強いものの、高学年になるにつれて同胞との連帯感が増すことを示すと考えられる。

### B-8. 人物の描き方

図24は11歳の不登校の男子児童のFDTであり、棒状の人物が描かれている。今回、棒状の人物、デザイン化された人物、陰影の人物など特殊な人物はまったく出現しなかった。Burnsや加藤は棒状の人物が防衛的な子どもにあらわれやすいとし、また臨床場面ではテストに非協力的であったり、対人不信感の強い児童にみられることがあり、このタイプのFDTは臨床的な意味が強いと考えられる。

### B-9. 人物の部分の省略

図25は8歳の女子児童のFDTで、本人、母親、父親の手が省略されている。検査後の質問に対して、『描くのを忘れた』と答えていた。また図26は11歳の女子児童のFDTで、母親と本人は手を後ろで組んでいるので描かれていないが、左端の父親は時間をかけても描けない様子であった。このような人物の部分の省略は377名中19名（5.0%）の児童に認められ、このうち4名は高学年群の児童であり、残りの15名はいずれも低学年群の児童であった。

低学年群の省略は行動観察や検査後の質問からみて、不注意から描き忘れたと考えられるものが多くみられた。しかし高学年群の場合は図26のように手を後ろで組んでいるために描かれていない描画が多く、消極的なパーソナリティを示すのかもしれない。また同じ図26で被検者は父親の手を描くことに強い抵抗を示しており、父親への不安や緊張が高く、交流を避ける傾向を示しているのかもしれない。このように高学年にみられる省略は、省略される部分の象徴的意味を考慮する必要があるだろう。

なお臨床場面では時折、目、鼻、口の省略された輪郭だけの顔が描かれるが、今回の一般児童には認められず、このタイプの描画も臨床的な意味が強いと考えられる。

### <3>人物を描いた標準家庭の児童のFDTを対象にした分析項目

以下の分析項目は両親ならびに同胞と同居し、かつ人物を描いた児童のFDTを対象にしたもので、これに該当したのは344名(男子171名、女子173名)のFDTであった。

#### C-1. 描かれなかった人物

図16は家族が全員描かれているFDTであるが、図27の8歳の女子児童のFDTでは父親と兄が描かれていない。このように家族の特定の人物あるいは本人が描かれていないFDTは344名の児童のうちの169名(49.1%)にみられ、鈴木(1995)の報告ともよく一致している。さらに描かれなかった人物の内訳をみると、男女ともに同胞がもっとも描かれにくく、以下、男子児童の場合は母親、父親、本人の順に、女子児童の場合は父親、本人、母親の順に描かれにくい傾向がみられた。逆にいうと、男子児童は父親を、女子児童は母親を省略しにくいことを示し、明らかな性差が認められた。児童期は社会化がもっとも盛んになる時期で、同性の親からの取り入れによって性役割を獲得していく過程でもあることから、同性の親への関心が高く、FDTでも省略されることが少ないと考えられる。

### <4>家族全員が描かれている標準家庭の児童のFDTを対象にした分析項目

以下の分析項目は、両親ならびに同胞と同居し、かつ家族全員を描いた児童のFDTを対象にしたもので、今回、この条件に該当したのは、175名(男子85名、女子90名)のFDTであった。

#### D-1. 最初に描いた人物

今回の調査で父親を第1番目に描いた児童は175名中59名(33.7%)でもっとも多く、次いで母親を第1番目に描いた児童が43名(24.6%)で、自分を描いた児童が39名(22.3%)で、同胞を描いた児童が31名(17.7%)でもっとも少なかった。日比は、KFDにおける人物像の描画順位が家族内の日常的序列を的確に反映していると述べている。しかしFDTでは第1番目に描かれる人物の出現頻度がかなり接近しており、必ずしも、家族の一般的な序列を反映してい



るとは考えにくい。

#### D-2. 最大の人物, D-3. 最小の人物

175名中、父親をもっとも大きく描いた児童は70名（40.0%）で、母親をもっとも大きく描いた児童は65名（37.1%）で、自分をもっとも大きく描いた児童は21名（12.0%）で、同胞をもっとも大きく描いた児童は17名（9.7%）であった。また175名中、父親をもっとも小さく描いた児童は15名（8.6%）で、母親をもっとも小さく描いた児童は11名（6.3%）で、自分をもっとも小さく描いた児童は46名（26.3%）で、同胞をもっとも小さく描いた児童は96名（54.9%）であった。これらの結果を、学年別、性別に検討すると、男子児童は各学年群ともに、父親、母親の順に大きく描き、同胞、本人を小さく描く傾向がみられた。これに対して女子児童の場合、低学年群では母親をもっとも大きく描かれていたFDTと、父親をもっとも大きく描かれていたFDTの出現頻度が同じであったが、中学年群と高学年群では母親、父親の順に大きく描き、同胞、本人を小さく描く傾向がみられた。

従来から非動的家族画では身長や年齢の順序に家族が描かれ、ややもすると合理的・防衛的描写になりがちであると指摘されてきた。しかしKFDにおける人物の大きさを調査した日比は、関心の高い人物ほど大きく強調されるとし、男女児童ともに同性の親を大きく描く傾向を見いだしている。今回の調査をみても、全体的には図28（9歳女子児童）のように同性の親を大きく描く傾向がみられ、FDTでも単なる家族描写になっていないことが示唆された。なお女子児童の場合、低学年群ではもっとも大きく描かれる人物として父親と母親の出現頻度に差がなく、中学年群以降で母親をもっとも大きく描く者が増加する傾向がみられた。これは発達心理学的にみて、8～9歳ころから社会化にともなう同性の親からの取り入れが活発化することを示すと考えられる。

#### D-4. 最近の人物, D-5. 最遠の人物

175名中、父親を自分のもっとも近いところに描いた児童は35名（20.0%）で、母親をもっとも近いところに描いた児童は43名（24.6%）で、同胞をもっとも近いところに描いた児童は92名（52.6%）であり、男女ともに半数以上の児童が同胞の近くに自分を描いていた。また175名中、父親をもっとも遠いところに描いた児童は77名（44.0%）で、母親をもっとも遠いところに描いた児童は46名（26.3%）で、同胞をもっとも遠いところに描いた児童は44名（25.1%）であった。描写された人物相互の距離が親密性の度合や感情的離反の強さをあらわすと考えられており、今回の資料は、一般児童の多くが同胞との仲間意識を有し強い親近感を抱いていることを示唆すると考えられる。

#### <5>各々の家族成員を対象にした分析項目

以下の分析項目はFDTに描かれたすべての人物を対象にしたものである。全児童380名の中で父親を描いた者は279名で、母親を描いた者は292名で、本人を描いた者は285名であった。また305名の児童が1人以上の同胞を描き、総数401名の同胞が描かれていた。

### E-1. 人物の方向

図29は9歳の男子児童のFDTで、横向き的人物が描かれている。また図30は小児心身症の11歳の男子児童のFDTで、人物がすべて後ろ向きに描かれている。今回の調査では、描かれた1257の人物のうちの1156(92.0%)が正面を向いた人物で、残りの101(8.0%)が横向きあるいは後ろ向き的人物であった。さらにこの101の人物のうちで、後ろ向き的人物は23(22.8%)であり、低い出現頻度を示した。横向きや後ろ向き的人物は逃避的で他人との交流を避けようとしたり、他人に拒否的な態度を示す被検者にあられやすいとされており、この解釈仮説からみても一般児童にあられにくく、特に後ろ向き的人物は臨床的な意味の強い特徴と考えられる。

### E-2. 人物の表情

図10、図16ならびに図28は人物に明るい表情が表現されているが、図2は不愉快な表情があらわれている。今回の調査では、描かれた1257の人物のうちの767(61.0%)が快に分類される表情を示したが、不快に分類されたのはわずかに36(2.9%)であり、残りの454(36.1%)の人物には明確な表情があらわれておらず、表情なしあるいはその他に分類された。

顔は他人とのコミュニケーションにおいて中心的な役割をはたしている部分で、描画に描かれる人物の表情は、被検者が他人とどのように接触しているかをあらわす重要な要素とみなされてきた。今回のFDTでは明るい表情の人物が半数以上をしめ、良好な対人関係をうかがい知ることができる。また表情の特にあらわれていない人物が約3割認められたことから、これらが直ちに対人関係の問題に結びついているとは考えにくい。ただ図2のような人物の不愉快な表情は一般児童のFDTにはきわめてまれであり、被検者の否定的な感情を反映していると考えられる。

## <6>FDTの内容に関する分析項目

以下はすべてのFDTの内容面に関する分析項目である。

### F-1. 場所

図30では、父親は職場、母親は炊事場、自分は塾、弟は自宅の居間というように4つの場所が設定されている。このようにFDTの背景となる場所が設定されているかどうかを調査すると、380名の中で、場所をはっきりと設定していたのは128名(33.7%)の児童であり、残りの

252名（66.3%）の児童は場所を特定せずに絵を描いていた。

場所を設定していた児童の中には、図30のように職場、居間、自室など2カ所以上の場所を描いている場合もあり、128名の児童のFDTには総計153の場所が描かれていた。

これらの内訳は、居間の49（32.0%）がもっとも多く、以下、戸外の48（31.3%）、自然の風景の13（8.5%）、台所の12（7.8%）、職場の6（3.9%）の順であった。以上の結果からみて、一般児童がFDTの背景として選択しやすい場所は、居間や戸外など家族が集合しやすい場所であり、逆に自室、学校、職場といった各々の家族が個人的に関係している場所は選択しにくいと考えられる。

さらに場所の設定に関する性差をみると、男子児童では戸外、居間、自然、職場などの順に出現頻度が高く、女子児童では居間、戸外、台所、自然の順となっている。これは、男子児童の場合は戸外や自然など、家庭以外の場所も家族の活動の場面ととらえているのに対して、女子児童の場合は、居間、台所といった家庭内の場所を家族の活動の場面ととらえやすいことを示し、男女間の興味の方向の相違を反映しているようである。特に台所の出現頻度は、女子児童の中学年群から高学年群にかけて急に高くなる傾向が認められ、性役割の分化の過程を象徴しているようである。

## F-2. 家族の相互作用

図31は10歳の女子児童のFDTで、家族全員で食事をしているところが描かれている。このように相互作用が表現されていたのは全児童380名中98名（25.7%）のFDTであった。このうち『家族と一緒に何かをしているところ』という内容の相互作用の出現率が16.6%ともっとも高く、図30のように『家族が別のことをしているところ』は7.9%という出現率であった。なお臨床群でときどきみられる『対立しているところ』という内容は今回まったく出現しなかった。また図32（8歳女子児童）のFDTのように、相互作用が特に表現されていない282名（74.2%）のFDTは『家族が並んでいるところ』や『家族が立って並んでいるところ』などであった。運動性を付加するKFDに比べて、FDTでは相互作用があらわれにくく、全体的な家族内力動についてはやはりKFDの方が理解しやすいようである。

## F-3. 主題

主題がはっきりとしていたのは380名中281名（73.9%）のFDTであり、この中には『父親が仕事をしているところ』と『家族が居間に集まっているところ』など、1枚の絵に複数の主題が選択されているものもあり、281名のFDTには329の主題が描かれていた。

もっとも高い出現頻度を示した主題は『家族が並んでいるところ』『家族が立って並んでいるところ』で、描かれた主題の約半数（51.1%）がこれに該当した。この他にも『レクリエーションを楽しんでいるところ』（20.4%）、『家事をしているところ』（6.1%）、『食事をしているところ』

ろ』(5.5%)などもみられた。

また主題の出現頻度を学年別に検討すると、出現頻度のもっとも高い『家族が並んでいるところ』は年齢とともに減少する傾向があり、逆に『仕事』『勉強』『レクリエーション』『休憩』『食事』『家事』などの主題が中学年群、高学年群で徐々に増加する傾向が認められた。これは低学年では家族を単に個人の集まりとして漠然と認識している者が多いのに対して、高学年では家族を凝集性の高い準拠集団とみなし、各々の家族の役割を意識化することを示していると考えられる。

さらに主題を男女別に検討すると、男子児童に高い出現頻度を示したのは『レクリエーション』であり、年齢とともに高くなる傾向がみられた。一方、女子児童では『食事をしているところ』『家事をしているところ』の出現頻度が高く、特に中学年群と高学年群の児童に高い出現頻度が認められ、8～9歳以降、男女間の性役割が分化し興味の方向が異なることを示していると考えられる。

## ま と め

小学校1年生から6年生までの一般児童380名のFDTを調査し、彼らが描く描画の特徴を数量的に検討した。

FDTの形式面では、ほとんどの児童が用紙を横に使用し、3色以上の色彩を用いて、用紙の中央あるいはやや左よりに絵を描いていた。また同性の親を最初にしかももっとも大きく描く児童が多かった。さらに、本人からみてもっとも近くに描かれやすい人物は同胞で、逆にもっとも遠くに描かれやすい人物は父親であった。なお透明性、パースペクティブ、区分化、包囲、用紙下部の線あるいは上部の線、エッジング、抹消、グルーピング、横向きあるいは後ろ向きの人物などはあまり出現しなかった。

FDTの内容面では、場所を特定せず、家族が並んでいるところをもっとも多く描かれたが、戸外でレクリエーションを楽しんだり、居間で家族が団らんしているところなどもよく描かれていた。さらに描かれた多くの人物に明るい表情が表現されており、不愉快な表情の人物はほとんどみられなかった。

ところで『あなたの家族を描きなさい』という教示を用いる従来の非動的家族画には、家族の身長や年齢の順序によって描かれる単純な家族描写があらわれやすくとされてきた。しかし今回の一般児童のFDTでは、人物のサイズ、描かれる位置、描かれる順序などは必ずしも現実の家族をそのまま反映するものではなく、また性別や発達段階によっても著しく異なる傾向が認められた。以上の結果から、FDTには被検者の家族への主観的な認知がグラフィック・コミュニケーションを通じて絵に表現されており、FDTは必ずしも家族の単純描写ではないことが示唆された。

参 考 文 献

- Bing, E.: The conjoint family drawing. *Fam. Proc.*, 9;173-194, 1970.
- Burns, R. C. & Kaufman, S. H.: Action styles and symbols in Kinetic Family Drawings (K-F-D). An interpretive manual. Brunner-Mazel, New York, 1970 (加藤, 伊倉, 久保記, 子どもの家族画診断, 黎明書房, 名古屋).
- 日比裕泰: K-F-D の研究(1). 日本心理学会第37回大会発表論文集, 494-495, 1973.
- 日比裕泰: 動的家族描写法 (K-F-D) の研究 I. 滋賀女子短期大学紀要, II ; 79-113, 1974.
- 日比裕泰: K-F-D の研究(3). 関西心理学会第87回大会発表論文集, 706, 1975.
- 日比裕泰: K-F-D の研究(4). 日本心理学会第40回大会発表論文集, 1111-1112, 1976.
- 日比裕泰: 動的家族描画法 (K-F-D) の研究III. 滋賀女子短期大学紀要, V ; 31-42, 1980.
- 日比裕泰: 動的家族描画法. ナカニシヤ出版, 京都, 1990.
- Hulse, W. C.: Children conflict expressed through family drawing. *J. Proj. Tech.*; 16 ; 66-79, 1952.
- 石川 元: 家族描画の治療的効果. *精神神経学雑誌*, 84(9); 680-705, 1982.
- 加藤孝正, 伊倉日出一, 久保義和: 動的家族画法のスタイルに関する研究. *芸術療法*, 7 ; 63-71, 1976.
- 加藤孝正, 清水敏子: 動的家族画と家族像への態度との関連性. *芸術療法*, 8 ; 33-38, 1977.
- 加藤孝正, 清水敏子: 動的家族画における行為と家族像への態度. *芸術療法*, 9 ; 25-32, 1978.
- 加藤孝正: 動的家族画 (KFD). *臨床描画研究*, I ; 87-104, 1986.
- Levenberg, S. B.: Professional training, psychodiagnostic skill, and Kinetic family drawings. *J. Person. Assess.*, 39 ; 389-393, 1975.
- O'Brien, R. P. & Patton, W. F.: Development of an objective scoring method for the kinetic family drawing. *J. Person. Assess.*, 38 ; 156-164, 1974.
- Shearn, C. R. & Russell, K. R.: Use of the technique for studying parent-child interaction. *J. Person. Assess.*, 33 ; 35-44, 1969.
- Sims, C. A.: Kinetic family drawing. *J. Person. Assess.*, 40 ; 91-94, 1974.
- 鈴木一華, 小林正太郎: 家族描画テストの解釈基準作成の試み(2). 日本心理学会第59回大会発表論文集, 241, 1995.
- 高橋雅春, 高橋依子: 樹木画テスト. 文教書院, 東京, 1986.
- 高橋雅春, 高橋依子: 人物画テスト. 文教書院, 東京, 1991.
- 高橋依子: 描画テストの実施法. *臨床描画研究*, I ; 130-138, 1986.